

◆ 財務諸表

● 貸借対照表

(単位：百万円)

科 目	平成17年度 (平成18年3月31日現在)	平成18年度 (平成19年3月31日現在)	科 目	平成17年度 (平成18年3月31日現在)	平成18年度 (平成19年3月31日現在)
■資産の部			■負債の部		
現 金	1,279	1,737	貯 金	2,077,158	2,086,628
預 け 金	935,963	957,866	当 座 貯 金	10,489	15,931
系 統 預 け 金	935,427	957,406	普 通 貯 金	23,532	23,805
系 統 外 預 け 金	536	459	貯 蓄 貯 金	85	84
譲 渡 性 預 け 金	—	—	通 知 貯 金	12,756	15,622
コ ー ル ロ ー ン	—	—	別 段 貯 金	2,608	2,964
買 現 先 勘 定	—	—	定 期 貯 金	2,027,346	2,027,848
債 券 貸 借 取 引 支 払 保 証 金	—	—	定 期 積 金	339	370
買 入 金 銭 債 権	1,500	7,438	譲 渡 性 貯 金	870	130
金 銭 の 信 託	34,220	37,103	売 現 先 勘 定	—	—
有 価 証 券	853,265	848,464	債 券 貸 借 取 引 受 入 担 保 金	—	—
国 債	414,221	399,417	借 用 金	—	20,000
地 方 債	27,719	28,265	代 理 業 務 勘 定	45	75
短 期 社 債	—	—	そ の 他 負 債	6,540	5,208
社 債	96,869	110,133	未 払 費 用	2,608	4,112
外 国 証 券	145,433	143,026	そ の 他 の 負 債	3,931	1,096
株 式	19,155	20,522	諸 引 当 金	6,502	6,514
そ の 他 証 券	149,865	147,099	相 互 援 助 積 立 金	5,193	5,273
貸 出 金	353,351	359,758	賞 与 引 当 金	98	90
手 形 貸 付	29,977	29,569	退 職 給 付 引 当 金	1,170	1,097
証 書 貸 付	212,295	211,392	役 員 退 任 給 与 引 当 金	40	54
当 座 貸 越	29,939	28,293	繰 延 税 金 負 債	5,237	6,589
金 融 機 関 貸 付	79,547	88,547	債 務 保 証	7,250	6,838
割 引 手 形	1,592	1,954	負 債 の 部 合 計	2,103,605	2,131,985
そ の 他 資 産	5,463	6,186	■資本の部		
未 収 収 益	3,137	4,089	出 資 金	27,862	—
そ の 他 の 資 産	2,325	2,097	(うち後配出資金)	16,466	—
固 定 資 産	3,032	3,048	回 転 出 資 金	14,015	—
業 務 用 固 定 資 産	2,973	—	再 評 価 積 立 金	31	—
業 務 外 固 定 資 産	58	—	法 定 準 備 金	27,500	—
有 形 固 定 資 産	—	2,405	資 本 準 備 金	0	—
無 形 外 固 定 資 産	—	642	利 益 準 備 金	27,500	—
外 部 出 資	65,559	65,373	剰 余 金	57,458	—
系 統 出 資	62,560	62,561	任 意 積 立 金	51,500	—
系 統 外 出 資	2,998	2,286	特 別 積 立 金	51,500	—
子 会 社 等 出 資	—	525	当 期 未 処 分 剰 余 金	5,958	—
債 務 保 証 見 返	7,250	6,838	(うち当期剰余金)	3,969	—
貸 倒 引 当 金	△12,238	△12,452	株 式 等 評 価 差 額 金	17,205	—
外 部 出 資 等 損 失 引 当 金	△969	△961	処 分 未 済 持 分	—	—
			資 本 の 部 合 計	144,073	—
			負 債 及 び 資 本 の 部 合 計	2,247,678	—
			■純資産の部		
			出 資 金	—	28,507
			(うち後配出資金)	—	16,880
			回 転 出 資 金	—	14,010
			資 本 準 備 金	—	0
			再 評 価 積 立 金	—	31
			利 益 剰 余 金	—	86,240
			利 益 準 備 金	—	28,300
			そ の 他 利 益 剰 余 金	—	57,940
			特 別 積 立 金	—	49,500
			当 期 未 処 分 剰 余 金	—	8,440
			(うち当期剰余金)	—	6,123
			処 分 未 済 持 分	—	—
			会 員 資 本 合 計	—	128,790
			そ の 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	—	19,625
			繰 延 ヘ ッ ジ 損 益	—	—
			評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	—	19,625
			純 資 産 の 部 合 計	—	148,416
資 産 の 部 合 計	2,247,678	2,280,402	負 債 及 び 純 資 産 の 部 合 計	—	2,280,402

(注) 「農業協同組合法施行規則」(平成17年農林水産省令第27号)別紙様式が「農業協同組合法施行規則の一部を改正する省令」(農林水産省令第41号平成18年4月28日)により改正され、平成18年5月1日から施行されたことに伴い、今年度から従来の「資産の部」の固定資産の内訳が「業務用固定資産」及び「業務外固定資産」から「有形固定資産」及び「無形固定資産」に、「資本の部」が「純資産の部」に改正され、「資産の部」の外部出資の内訳に「子会社等出資」が追加されています。

● 損益計算書

(単位：百万円)

科 目	平成17年度	平成18年度
	[平成17年4月1日から 平成18年3月31日まで]	[平成18年4月1日から 平成19年3月31日まで]
経常収益	38,323	40,715
資金運用収益	26,009	26,458
(うち貸出金利息)	4,724	4,864
(うち預け金利息)	7,625	8,896
(うち有価証券利息配当金)	13,638	12,658
役員取引等収益	468	444
その他事業収益	3,198	1,932
その他経常収益	8,646	11,879
(うちその他の経常収益)	1,106	3,797
経常費用	32,598	34,027
資金調達費用	13,310	15,132
(うち貯金利息)	13,297	15,092
役員取引等費用	261	379
その他事業費用	3,346	5,038
その他経常費用	4,918	4,852
(うち貸出金償却)	10,761	8,624
(うちその他の経常費用)	4,873	826
	934	3,953
経常利益	5,724	6,687
特別利益	170	352
特別損失	3	61
税引前当期利益	5,891	6,978
法人税、住民税及び事業税	820	432
過年度法人税等追徴税額	122	—
過年度法人税、住民税及び事業税	—	161
法人税等調整額	978	261
当期剰余金	3,969	6,123
前期繰越剰余金	1,288	2,317
目的積立金取崩額	700	—
当期未処分剰余金	5,958	8,440

- (注) 1. 資金運用収益の「(うち預け金利息)」には、受取奨励金及び受取特別配当金が含まれています。
2. 資金調達費用の「(うち貯金利息)」には、支払奨励金が含まれています。

● 平成17年度 注記表

1. 重要な会計方針に関する事項

- 記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示しており、金額百万円未満の科目については「0」で表示しております。また、取引はあるが期末には残高がない勘定科目は「-」で表示しております。
- 有価証券(外部出資勘定の株式を含む)の評価基準及び評価方法は、「金融商品に係る会計基準の設定に関する意見書」(平成11年1月22日企業会計審議会)に基づき、有価証券の保有目的区分ごとに次のとおり行っています。
 - ・ 売買目的の有価証券……時価法(売却原価は移動平均法により算定)
 - ・ 満期保有目的の債券……定額法による償却原価法(売却原価は移動平均法により算定)
 - ・ 子会社・子法人等株式…取得原価法(売却原価は移動平均法により算定)
 - ・ 及び関連法人等株式
 - ・ その他有価証券
 - 時価のあるもの…決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部資本直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)
 - 時価のないもの…取得原価法(売却原価は移動平均法により算定)

なお、取得価額と券面金額との差額のうち金利調整と認められる部分については、償却原価法による取得価額の修正を行っていません。
- 金銭の信託(合同運用を除く。)において信託財産を構成している有価証券の評価基準及び評価方法は、上記(2)の有価証券と同様の方法によっており、信託の契約単位ごとに信託財産構成物である資産及び負債の評価額の合計額をもって貸借対照表に計上しています。
- デリバティブ取引の評価は時価法により行っています。
- 固定資産の減価償却は、それぞれ次の方法により行い、資産から直接減額して計上しています。
 - 建物 定率法(ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)については、定額法)を採用しています。なお、主な耐用年数は17年～50年です。
 - 動産 定率法を採用しています。なお、主な耐用年数は3年～25年です。
 - ソフトウェア 自社利用ソフトウェアについては、当会における利用可能期間(5年)に基づく定額法により償却しています。
- 外貨建資産・負債は、主として決算日の為替相場による円換算額を付しています。
- 引当金の計上方法
 - 貸倒引当金
 - 貸倒引当金は、「経理規程」に則り、次のとおり計上しています。

破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という）に係る債権については、以下なお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産自己査定規程に基づき、担当部署で査定を行った結果を資産監査部署において検証し、その査定結果により上記の引当を行っています。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は15,225百万円であります。

- ② 退職給付引当金
退職給付引当金は、職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務及び年金資産の見込み額に基づき、必要額を計上しています。また数理計算上の差異の処理方法は、その発生年度において全額費用または収益処理しています。
- ③ 役員退任給与引当金
役員退任給与引当金については、役員に対する退任給与金の支給に備えるため、「役員退任給与金引当金規程」に基づく基準額を計上しています。
- ④ 賞与引当金
賞与引当金は、職員への賞与の支払に備えるため、職員に対する賞与の支給見込額のうち、当期に帰属する額を計上しております。
- ⑤ 外部出資等損失引当金
外部出資等損失引当金は、外部出資に対する損失に備えるため有価証券等の発行会社の財務状況等を勘案して必要と認められる額を計上しています。
- (8) リース物件の所有権が借主に転移すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっています。
- (9) 消費税等の会計処理
消費税及び地方消費税（以下「消費税等」という。）の会計処理は、税抜方式によっています。ただし、固定資産に係る控除対象外消費税等は当年度の費用に計上しています。
- (10) 固定資産の減損に係る会計基準（「固定資産の減損に係る会計基準の設定に関する意見書」（企業会計審議会平成14年8月9日）及び「固定資産の減損に係る会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第6号平成15年10月31日））が、平成17年4月1日以降開始する事業年度から適用されることとなったことに伴い、当年度から同会計基準及び同適用指針を適用しておりますが、これによる税引前当期利益に与える影響はありません。
なお、業務用資産についてはキャッシュ・フローの相互補完性及び機能特性等を勘案し、本・支店並びに事務所及び寮等を一つのグルーピングとしており、また、遊休資産については、各資産をグルーピングの最小単位としております。

2. 貸借対照表に関する事項

- (1) 固定資産の減価償却累計額は3,286百万円です。
- (2) リース契約により使用している重要な固定資産としては、電子計算機等があり、未経過リース料年度末残高相当額は、122百万円です。
- (3) 為替決済にかかる担保として預け金66,000百万円、先物取引の証拠金等の代用として有価証券2,596百万円、また、県公金収納代理及び指定金融等事務取扱の担保として、有価証券41百万円、預け金35百万円を差し入れています。
- (4) 子会社に対する金銭債権、金銭債務の総額は次のとおりです。

子会社に対する金銭債権の総額	一百万円
子会社に対する金銭債務の総額	62百万円
- (5) 理事、経営管理委員及び監事との間の取引による金銭債権、金銭債務の額
該当ありません
- (6) 貸出金のうち、破綻先債権額は190百万円、延滞債権額は19,805百万円です。なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金です。
- (7) 貸出金のうち、3か月以上延滞債権額は該当ありません。なお、3か月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3か月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものです。
- (8) 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は5,290百万円です。なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3か月以上延滞債権に該当しないものです。
- (9) 破綻先債権額、延滞債権額、3か月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は25,285百万円です。
なお、(6)から(9)に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額です。
- (10) 割引手形は、業種別監査委員会報告第24号に基づき、金融取引として処理しています。これより受け入れた商業手形は、自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は1,592百万円です。
- (11) 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、120,111百万円です。
- (12) 貸出金には、他の債権よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付貸出金64,547百万円が含まれています。

3. 損益計算書に関する事項

- (1) 子会社との取引高の総額は次のとおりです。

子会社との取引による収益総額	一百万円
子会社との取引による費用総額	138百万円
- (2) 貸出金償却は、すでに個別貸倒引当金を引き当てていた債権について、償却額と引当金戻入額を相殺した残額を表示しています。相殺した金額は3,151百万円です。
- (3) 貸出金償却・その他の経常費用及びその他の経常収益には、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等としてすでに債権額から直接減額した債権のうち、売却した債権額等に伴って発生する費用及び収益1,055百万円がそれぞれ含まれます。また、その他の経常費用には、すでに個別貸倒引当金を引き当てていた債権のうち、売却した債権の売却費用が含まれますが、引当金戻入額と相殺して表示しています。相殺した金額は0百万円です。

4. 有価証券に関する事項

- (1) 有価証券の時価及び評価差額等に関する事項は次のとおりです。これらには、有価証券のほか、「預け金」中の譲渡性預け金、並びに「買入金銭債権」中のコマース・ペーパー及び信託受益権、「外部出資勘定」中の子会社関連会社等の株式が含まれています。以下(5)まで同様です。
 - ① 売買目的有価証券
該当ありません
 - ② 満期保有目的の債券で時価のあるもの
該当ありません
 - ③ その他有価証券で時価のあるもの

	取得原価又は償却原価	貸借対照表計上額	評価差額	うち益	うち損
国債	421,105百万円	414,221百万円	△6,883百万円	2,700百万円	9,584百万円
地方債	27,978	27,719	△259	46	305
政府保証債	1,599	1,601	2	2	—
金融債	22,589	22,347	△241	—	241
短期社債	—	—	—	—	—
社債	95,263	96,869	1,606	2,345	739
外国証券	143,099	145,433	2,334	4,047	1,713
株式	11,288	19,155	7,866	7,873	6
受益証券	105,505	125,916	20,410	20,837	427
その他	1,500	1,500	—	—	—
合計	829,930	854,765	24,835	37,853	13,017

なお、上記評価差額から繰延税金負債7,713百万円を差し引いた額17,121百万円が「株式等評価差額金」に含まれています。

(2) 当年度中に売却した満期保有目的の債券

該当ありません

(3) 当年度中に売却したその他有価証券は次のとおりです。

売却額	売却益	売却損
310,319百万円	9,151百万円	2,997百万円

(4) 時価のない有価証券のうち、主なものの内容と貸借対照表計上額は、次のとおりです。

内容	貸借対照表計上額
満期保有目的の債券	
該当ありません	
子会社・子法人等株式及び関連法人等株式	
子会社及び子法人等株式	30百万円
関連法人等株式	495百万円
その他有価証券	
非上場株式（店頭売買株式を除く）	436百万円

(5) その他有価証券のうち満期があるもの及び満期保有目的の債券の期間ごとの償還予定額は次のとおりです。

	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
国債	28,251百万円	172,924百万円	151,490百万円	61,555百万円
地方債	3,155	15,614	8,949	—
政府保証債	—	—	1,601	—
金融債	—	22,347	—	—
短期社債	—	—	—	—
社債	4,151	56,856	35,861	—
外国証券	20,523	85,624	36,249	3,036
その他	1,500	7,508	46,887	—
合計	57,581	360,876	281,040	64,591

(6) 金銭の信託の保有目的区分別の内訳は次のとおりです。

運用目的の金銭の信託	
貸借対照表計上額	29,099百万円
当期の損益に含まれた評価差額	59百万円
満期保有目的の金銭の信託	
該当ありません	
その他の金銭の信託	
取得原価	5,000百万円
貸借対照表計上額	5,121百万円
評価差額	121百万円
うち益	121百万円
うち損	—百万円

なお、上記評価差額から繰延税金負債37百万円を差し引いた額83百万円が「株式等評価差額金」に含まれています。

5. 退職給付に関する事項

(1) 退職給付

① 採用している退職給付制度の概要

職員の退職給付にあてるため、「職員退職給与規程」に基づき、退職一時金制度を採用しています。

また、この制度に加え、社団法人長野県農業協同組合職員退職金共済会に加入し、共済会規約に基づく退職共済金制度を採用しています。

② 退職給付債務及びその内訳

a 退職給付債務の額	2,475百万円
b 年金資産の額（退職金共済会積立）	1,305百万円
c 前払年金費用の額	—百万円
d 退職給付引当金の額	1,170百万円
e 未認識過去勤務債務の額	—百万円
f 未認識数理計算上の差異の額	—百万円

③ 退職給付費用の内訳

a 勤務費用の額	118百万円
b 利息費用の額	47百万円
c 期待運用収益の額	6百万円
d 過去勤務債務の費用処理額	—百万円
e 数理計算上の差異の費用処理額	△15百万円
f 退職給付債務の計算の基礎としなかった臨時の支払退職金	—百万円

④ 退職給付債務等の計算基礎

- 採用した割引率は1.94%で、年金資産にかかる期待運用収益率は0.50%としています。
- 退職給付見込額については、発生給付評価方法に基づき、勤務年数による期間按分方式を採用しています。
- 過去勤務債務については、該当ありません。
- 数理計算上の差異は、当年度で全額収益処理しています。

(2) 厚生年金保険制度及び農林漁業団体職員共済組合制度の統合を図るための農林漁業団体職員共済組合法等を廃止する等の法律附則第57条に基づき存続組合から将来見込額と示された特例業務負担金額は474百万円です。

6. 税効果会計に関する事項

	(前年度)	(当年度)
(1) 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生原因別の主な内訳等 繰延税金資産及び繰延税金負債の内訳は次のとおりです。		
繰延税金資産		
貸倒引当金超過額	3,194百万円	3,417百万円
貸出金償却超過額	4,243百万円	4,182百万円
退職給付引当金超過額	317百万円	330百万円
その他	3,055百万円	3,298百万円
繰延税金資産小計	10,811百万円	11,229百万円
評価性引当額	△7,319百万円	△8,715百万円
繰延税金資産合計 (A)	3,492百万円	2,513百万円
繰延税金負債 (B)	5,807百万円	7,751百万円
その他有価証券	5,807百万円	7,751百万円
繰延税金資産 (負債) の純額 (A)-(B)	(2,315百万円)	(5,237百万円)
(2) 法定実効税率と法人税等負担率との差異の主な原因		
法定実効税率	(前年度) 31.06%	(当年度) 31.06%
(調整)		
交際費等損金不算入項目	0.93%	0.42%
事業利用分量配当金等	△24.25%	△22.92%
貸倒引当金超過額対象除外	△29.30%	10.34%
貸出金償却超過額対象除外	70.33%	8.34%
相互援助積立金	△7.51%	5.17%
その他	△1.47%	0.21%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	39.79%	32.62%

●平成18年度 注記表

1. 重要な会計方針に関する事項

- 記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示しており、金額百万円未満の科目については「0」で表示しております。また、取引はあるが期末には残高がない勘定科目は「-」で表示しております。
- 有価証券（外部出資勘定の株式を含む。）の評価基準及び評価方法は、「金融商品に係る会計基準の設定に関する意見書」（平成11年1月22日企業会計審議会）に基づき、有価証券の保有目的区分ごとに次のとおり行っています。
 - ・売買目的の有価証券……時価法（売却原価は移動平均法により算定）
 - ・満期保有目的の債券……定額法による償却原価法（売却原価は移動平均法により算定）
 - ・子会社・子法人等株式…取得原価法（売却原価は移動平均法により算定）及び関連法人等株式
 - ・その他有価証券
 - 時価のあるもの…決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）
 - 時価のないもの…取得原価法（売却原価は移動平均法により算定）
 なお、取得価額と券面金額との差額のうち金利調整と認められる部分については、償却原価法による取得価額の修正を行っていません。
- 金銭の信託（合同運用を除く。）において信託財産を構成している有価証券の評価基準及び評価方法は、上記(2)の有価証券と同様の方法によっており、信託の契約単位ごとに信託財産構成物である資産及び負債の評価額の合計額をもって貸借対照表に計上しています。
- デリバティブ取引の評価は時価法により行っています。
- 有形固定資産の減価償却は、それぞれ次の方法により行い、資産から直接減額して計上しています。
 - 建物 定率法（ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く。）については、定額法）を採用しています。なお、主な耐用年数は17年～50年です。
 - 動産 定率法を採用しています。なお、主な耐用年数は3年～25年です。
- 無形固定資産の減価償却は、定額法により償却しています。そのうち自社利用ソフトウェアについては、当会における利用可能期間（5年）に基づいて償却しています。
- 外貨建資産・負債は、主として決算日の為替相場による円換算額を付しています。
- 引当金の計上方法
 - 貸倒引当金

貸倒引当金は、「経理規程」に則り、次のとおり計上しています。

破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下なお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産自己査定規程に基づき、資産査定部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っていません。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は14,565百万円であります。
 - 退職給付引当金

退職給付引当金は、職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務及び年金資産の見込み額に基づき、必要額を計上しています。また、数理計算上の差異の処理方法は、その発生年度において全額費用または収益処理しています。
 - 役員退任給与引当金

役員退任給与引当金については、役員に対する退任給与金の支給に備えるため、「役員退任給与金引当金規程」に基づく基準額を計上しています。
 - 賞与引当金

賞与引当金は、職員への賞与の支払に備えるため、職員に対する賞与の支給見込額のうち、当期に帰属する額を計上しています。
 - 外部出資等損失引当金

外部出資等損失引当金は、外部出資に対する損失に備えるため外部出資先の財務状況等を勘案して必要と認められる額を計上しています。
- リース物件の所有権が借主に転移すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっています。
- 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税（以下「消費税等」という。）の会計処理は、税抜方式によっています。ただし、固定資産に係る控除対象外消費税

税等は当年度の費用に計上しています。

(11) 「農業協同組合法施行規則」(平成17年農林水産省令第27号)別紙様式が「農業協同組合法施行規則の一部を改正する省令」(農林水産省令第41号平成18年4月28日)により改正され、平成18年5月1日から施行されたことに伴い、当年度から以下のとおり表示を変更しております。

- ① 「資本の部」は「純資産の部」とし、会員資本、評価・換算差額等に区分のうえ表示しています。
なお、当年度末における従来の「資本の部」の合計に相当する金額は148,416百万円であります。
- ② 従来、任意積立金の内訳として表示していた「特別積立金」については、「その他利益剰余金」の内訳として、目的積立金部分は個別名称により表示することとし、目的積立金以外の部分は「特別積立金」として表示しています。
- ③ 「株式等評価差額金」は、「その他有価証券評価差額金」として表示しています。
- ④ 「固定資産」は、「業務用固定資産」及び「業務外固定資産」に区分して表示していましたが、「有形固定資産」及び「無形固定資産」への区分表示へ変更しています。

2. 貸借対照表に関する事項

- (1) 有形固定資産の減価償却累計額は3,158百万円です。
- (2) リース契約により使用している重要な固定資産としては、電子計算機等があり、未経過リース料年度末残高相当額は、128百万円です。
- (3) 為替決済にかかる担保として預け金66,000百万円、先物取引の証拠金等の代用として有価証券2,744百万円、また、県公金収納代理及び指定金融等事務取扱の担保として、有価証券41百万円、預け金35百万円を差し入れています。
- (4) 子会社等に対する金銭債権、金銭債務の総額は次のとおりです。
子会社等に対する金銭債権の総額 248百万円
子会社等に対する金銭債務の総額 2,934百万円
- (5) 理事、経営管理委員及び監事との間の取引による金銭債権、金銭債務の総額
該当ありません
- (6) 貸出金のうち、破綻先債権額は758百万円、延滞債権額は18,099百万円です。なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒債却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金です。
- (7) 貸出金のうち、3か月以上延滞債権額は該当ありません。なお、3か月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3か月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものです。
- (8) 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は2,830百万円です。なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3か月以上延滞債権に該当しないものです。
- (9) 破綻先債権額、延滞債権額、3か月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は21,687百万円です。
なお、(6)から(9)に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額です。
- (10) 割引手形は、業種別監査委員会報告第24号に基づき、金融取引として処理しています。これより受け入れた商業手形は、自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は1,954百万円です。
- (11) 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、110,054百万円であります。
- (12) 貸出金には、他の債権よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付貸出金66,447百万円が含まれています。
- (13) 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金です。

3. 損益計算書に関する事項

- (1) 子会社等との取引による収益総額 9百万円
うち事業取引高 9百万円
うち事業取引以外の取引高 ー百万円
- (2) 子会社等との取引による費用総額 617百万円
うち事業取引高 617百万円
うち事業取引以外の取引高 ー百万円
- (3) 貸出金償却は、すでに個別貸倒引当金を引き当てていた債権について、償却額と引当金戻入額を相殺した残額を表示しています。相殺した金額は3,416百万円です。
- (4) 貸出金償却・その他の経常費用及びその他の経常収益には、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等としてすでに債権額から直接減額した債権のうち、売却した債権額等に伴って発生する費用及び収益3,516百万円がそれぞれ含まれます。また、その他の経常費用には、すでに個別貸倒引当金を引き当てていた債権のうち、売却した債権の売却費用が含まれますが、引当金戻入額と相殺して表示しています。相殺した金額は47百万円です。

4. 有価証券に関する事項

(1) 有価証券の時価及び評価差額等に関する事項は次のとおりです。これらには、有価証券のほか、「買入金銭債権」中の信託受益権、「外部出資勘定」中の子会社関連会社等の株式が含まれています。以下(5)まで同様です。

- ① 売買目的有価証券
該当ありません
- ② 満期保有目的の債券で時価のあるもの
該当ありません
- ③ その他有価証券で時価のあるもの

	取得原価又は償却原価	貸借対照表計上額	評価差額	うち益	うち損
国債	399,711百万円	399,417百万円	△293百万円	2,227百万円	2,521百万円
地方債	28,335	28,265	△69	75	145
政府保証債	1,599	1,617	18	18	ー
金融債	24,589	24,527	△61	32	94
短期社債	ー	ー	ー	ー	ー
社債	107,908	110,133	2,225	2,505	280
外国証券	137,927	143,026	5,099	6,261	1,162
株式	12,637	20,522	7,884	7,964	79
受益証券	107,355	120,953	13,598	14,031	433
その他	7,440	7,438	△1	ー	1
合計	827,505	855,903	28,398	33,116	4,718

なお、上記評価差額から繰延税金負債8,820百万円を差し引いた額19,577百万円が「その他有価証券評価差額金」に含まれています。

- (2) 当年度中に売却した満期保有目的の債券
該当ありません
- (3) 当年度中に売却したその他有価証券は次のとおりです。

	売却額	売却益	売却損
	259,650百万円	8,656百万円	4,379百万円
(4) 時価のない有価証券のうち、主なものの内容と貸借対照表計上額は、次のとおりです。			
内 容			貸借対照表計上額

満期保有目的の債券			
該当ありません			
子会社・子法人等株式及び関連法人等株式			
子会社及び子法人等株式			30百万円
関連法人等株式			495百万円
その他有価証券			
非上場株式（店頭売買株式を除く。）			269百万円

(5) その他有価証券のうち満期があるもの及び満期保有目的の債券の期間ごとの償還予定額は次のとおりです。

	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
国債	31,384百万円	170,902百万円	125,969百万円	71,160百万円
地方債	1,635	15,637	10,992	—
政府保証債	—	1,617	—	—
金融債	—	24,527	—	—
短期社債	—	—	—	—
社債	18,040	64,663	27,428	—
外国証券	14,288	82,561	38,506	7,670
その他	500	17,634	36,274	—
合計	65,848	377,545	239,171	78,831

(6) 金銭の信託の保有目的区分別の内訳は次のとおりです。

運用目的の金銭の信託		
貸借対照表計上額		31,034百万円
当期の損益に含まれた評価差額		△5百万円
満期保有目的の金銭の信託		
該当ありません		
その他の金銭の信託		
取得原価		6,000百万円
貸借対照表計上額		6,069百万円
評価差額		69百万円
うち益		69百万円
うち損		—百万円

なお、上記評価差額から繰延税金負債21百万円を差し引いた額48百万円が「その他有価証券評価差額金」に含まれています。

5. 退職給付に関する事項

(1) 退職給付

① 採用している退職給付制度の概要

職員の退職給付にあてるため、「職員退職給与規程」に基づき、退職一時金制度を採用しています。

また、この制度に加え、社団法人長野県農業協同組合職員退職金共済会に加入し、共済会規約に基づく退職共済金制度を採用しています。

② 退職給付債務及びその内訳

a 退職給付債務の額	2,444百万円
b 年金資産の額（退職金共済会積立）	1,347百万円
c 前払年金費用の額	—百万円
d 退職給付引当金の額	1,097百万円
e 未認識過去勤務債務の額	—百万円
f 未認識数理計算上の差異の額	—百万円

③ 退職給付費用の内訳

a 勤務費用の額	115百万円
b 利息費用の額	46百万円
c 期待運用収益の額	6百万円
d 過去勤務債務の費用処理額	—百万円
e 数理計算上の差異の費用処理額	△49百万円
f 退職給付債務の計算の基礎としなかった臨時的支払退職金	—百万円

④ 退職給付債務等の計算基礎

- 採用した割引率は2.029%で、年金資産に係る期待運用収益率は0.50%としています。
- 退職給付見込額については、発生給付評価方法に基づき、勤務年数による期間按分方式を採用しています。
- 過去勤務債務については、該当ありません。
- 数理計算上の差異は、当年度で全額収益処理しています。

(2) 人件費には、厚生年金保険制度及び農林漁業団体職員共済組合制度の統合を図るための農林漁業団体職員共済組合法等を廃止する等の法律附則第57条の規定に基づき、旧農林共済組合（存続組合）が行う特例年金給付等の業務に要する費用に充てるため提出した特例業務負担金を含めて計上しています。

なお、当事業年度において存続組合に対して提出した特例業務負担金の額は、20百万円となっています。

また、存続組合より示された平成19年3月現在における平成44年3月までの特例業務負担金の将来見込額は、492百万円となっています。

6. 税効果会計に関する事項

(1) 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生原因別の主な内訳等
繰延税金資産及び繰延税金負債の内訳は次のとおりです。

繰延税金資産	
貸倒引当金超過額	3,472百万円
貸出金償却超過額	4,071百万円
退職給付引当金超過額	313百万円
支払奨励金未払費用	578百万円
外部出資等損失引当金	298百万円
その他	2,325百万円
繰延税金資産小計	11,059百万円
評価性引当額	△8,807百万円

繰延税金資産合計(A)	2,252百万円
繰延税金負債	
その他有価証券	△8,842百万円
繰延税金負債合計(B)	△8,842百万円
繰延税金負債の純額(A)+(B)	6,589百万円

(2) 法定実効税率と法人税等負担率との差異の主な原因

法定実効税率	31.06%
(調整)	
交際費等損金不算入項目	0.36%
事業分量配当金等	△20.51%
評価性引当額	1.32%
その他	0.02%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	12.25%

● 剰余金処分計算書

(単位：百万円)

科 目	平成17年度	平成18年度
当 期 未 処 分 剰 余 金	5,958	8,440
任 意 積 立 金 取 崩 額	2,000	—
目 的 積 立 金 取 崩 額	2,000	—
計	7,958	8,440
剰 余 金 処 分 額	5,641	6,702
利 益 準 備 金	800	1,300
任 意 積 立 金	—	500
経 営 基 盤 安 定 化 積 立 金	—	500
出 資 配 当 金	522	593
普 通 出 資 に 対 す る 配 当 金	334	341
後 配 出 資 に 対 す る 配 当 金	188	251
事 業 分 量 配 当 金	4,318	4,309
次 期 繰 越 剰 余 金	2,317	1,737

(注) 1. 出資配当率 平成17年度 平成18年度

- ①普通出資配当率 3.0% 3.0%
 ②後配出資配当率 1.5% 1.5%

2. 事業分量配当金の分配の基準

平成17年度

①普通特配

中途解約を除く1カ年定期貯金の計算期間平均残高から、当座貸越、1カ年定期貯金担保手形貸付及び地方公共団体等貸付原資(平成17年4月28日制定の「地方公共団体等転貸資金貸出要項」によるものを除く。)の期間中平均残高を控除した額に対し

0.13%

②特別特配

ア. 対象

長野県JAバンク支援制度加入農業協同組合

イ. 対象貯金

普通特配と同じ

ウ. 配当率

0.10%

平成18年度

平成17年度と同じ

3. 目的積立金の種類、積立目的、積立目標額、取崩基準等は次のとおりです。

平成18年度

経営基盤安定化積立金

①目的

一層の自己資本の充実とJAの経営安定化等県下信用事業の基盤の維持・強化に資するため、予測しがたい諸リスクに備えて積み立てる。

②積立目標額

50億円の残高に達するまでの額

③取崩基準

総会の決議に基づき、上記目的に照らして必要な額を取り崩すことができる。

◆ 貯 金

● 科目別貯金平均残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成17年度		平成18年度		増 減		
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比	
流動性貯金	当 座 貯 金	12,158	0.6	13,302	0.6	1,143	0.0
	普 通 貯 金	20,751	1.0	20,062	1.0	△689	0.0
	貯 蓄 貯 金	90	0.0	88	0.0	△1	0.0
	通 知 貯 金	28,314	1.3	25,875	1.2	△2,438	△0.1
	別 段 貯 金	2,901	0.1	4,449	0.2	1,547	0.1
	計	64,215	3.0	63,777	3.0	△438	0.0
定期性貯金	定 期 貯 金	2,040,254	96.9	2,051,923	96.9	11,668	0.0
	うち積立定期貯金	429	0.0	392	0.0	△37	0.0
	うち定期貯金	2,039,825	96.9	2,051,531	96.9	11,706	0.0
	定 期 積 金	350	0.0	362	0.0	12	0.0
	計	2,040,605	96.9	2,052,286	96.9	11,681	0.0
讓 渡 性 貯 金	1,130	0.1	905	0.1	△224	0.0	
合 計	2,105,951	100.0	2,116,969	100.0	11,017	0.0	

● 定期貯金残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成18年3月末		平成19年3月末		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
固定金利定期貯金	2,026,919	100.0	2,027,437	100.0	518	0.0
変動金利定期貯金	68	0.0	50	0.0	△18	0.0
定期貯金計	2,026,988	100.0	2,027,488	100.0	500	0.0

(注) 定期貯金残高には積立定期貯金は含まれていません。

◆ 貸出金

● 科目別・貸出先別貸出金平均残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成17年度		平成18年度		増 減			
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比		
手 形 貸 付 金	28,359	8.0	28,561	8.3	201	0.3		
証 書 貸 付 金	221,056	62.8	208,829	60.3	△12,226	△2.5		
当 座 貸 越	28,379	8.1	27,130	7.8	△1,249	△0.3		
金 融 機 関 貸 付 金	72,462	20.6	80,544	23.2	8,082	2.6		
割 引 手 形	1,830	0.5	1,446	0.4	△383	△0.1		
合 計	352,087	100.0	346,512	100.0	△5,575	0.0		
貸出先別残高	会 員	総 合 農 協	3,239	0.9	4,695	1.4	1,455	0.5
		その他農協連合会	12,159	3.4	9,586	2.8	△2,572	△0.6
		会員の組合員	49,163	14.0	39,626	11.4	△9,536	△2.6
		准 会 員	6,329	1.8	6,627	1.9	298	0.1
		計	70,891	20.1	60,537	17.5	△10,354	△2.6
	外 員	地方公共団体	4,899	1.4	4,270	1.2	△628	△0.2
		金 融 機 関	72,462	20.6	80,544	23.2	8,082	2.6
そ の 他		203,834	57.9	201,159	58.1	△2,674	0.2	
	計	281,196	79.9	285,974	82.5	4,778	2.6	

● 貸出金の金利条件別内訳残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成18年3月末		平成19年3月末		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
固定金利貸出	144,714	41.0	140,387	39.0	△4,326	△2.0
変動金利貸出	208,637	59.0	219,370	61.0	10,733	2.0
合 計	353,351	100.0	359,758	100.0	6,406	0.0

(注) 手形貸付、割引手形等の短期資金については、変動金利貸出に含めています。

●貸出金の担保別内訳残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成18年3月末		平成19年3月末		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
貯 金 等	672	0.2	3,332	0.9	2,660	0.7
有 価 証 券	478	0.1	438	0.1	△40	0.0
動 産 ・ 不 動 産	50,006	14.2	42,315	11.8	△7,691	△2.4
そ の 他 の 担 保	8,269	2.3	8,039	2.2	△230	△0.1
計	59,427	16.8	54,125	15.0	△5,301	△1.8
農 業 信 用 基 金 協 会 保 証	235	0.1	321	0.1	85	0.0
そ の 他 の 保 証	10,206	2.9	9,971	2.8	△235	△0.1
計	10,441	3.0	10,292	2.9	△149	△0.1
信 用	283,482	80.2	295,339	82.1	11,857	1.9
合 計	353,351	100.0	359,758	100.0	6,406	0.0

●債務保証の担保別内訳残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成18年3月末		平成19年3月末		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
貯 金 等	—	—	—	—	—	—
有 価 証 券	—	—	—	—	—	—
動 産	—	—	—	—	—	—
不 動 産	21	0.3	35	0.5	13	0.2
そ の 他 の 担 保	812	11.2	677	9.9	△134	△1.3
計	834	11.5	712	10.4	△121	△1.1
信 用	6,415	88.5	6,125	89.6	△290	1.1
合 計	7,250	100.0	6,838	100.0	△412	0.0

●貸出金の使途別内訳残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成18年3月末		平成19年3月末		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
設 備 資 金	94,225	26.7	52,083	14.5	△42,142	△12.2
運 転 資 金	259,125	73.3	307,674	85.5	48,548	12.2
合 計	353,351	100.0	359,758	100.0	6,406	0.0

●貸出金業種別残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成18年3月末		平成19年3月末		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
農 業	529	0.1	609	0.2	80	0.1
林 業	—	—	—	—	—	—
水 産 業	—	—	—	—	—	—
製 造 業	53,048	15.0	55,418	15.4	2,369	0.4
鉱 業	—	—	—	—	—	—
建 設 業	4,674	1.3	4,745	1.3	70	0.0
電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業	7,675	2.2	3,675	1.0	△4,000	△1.2
運 輸 ・ 通 信 業	25,129	7.1	22,768	6.3	△2,361	△0.8
卸 売 ・ 小 売 業 ・ 飲 食 業	36,567	10.4	32,566	9.1	△4,000	△1.3
金 融 ・ 保 険 業	79,547	22.5	88,547	24.6	9,000	2.1
不 動 産 業	10,098	2.9	12,261	3.4	2,163	0.5
サ ー ビ ス 業	86,697	24.5	94,609	26.3	7,911	1.8
地 方 公 共 団 体 ・ 公 社 等	46,358	13.1	41,444	11.5	△4,914	△1.6
そ の 他	3,026	0.9	3,112	0.9	86	0.0
合 計	353,351	100.0	359,758	100.0	6,406	0.0

●貸倒引当金の期末残高及び期中の増減額

(単位：百万円)

区 分	平成 17 年度					平成 18 年度				
	期首残高	期中増加額	期中減少額		期末残高	期首残高	期中増加額	期中減少額		期末残高
			目的使用	その他				目的使用	その他	
一般貸倒引当金	4,134	2,841	—	4,134	2,841	2,841	2,242	—	2,841	2,242
個別貸倒引当金	7,374	9,396	3,152	4,222	9,396	9,396	10,209	3,464	5,932	10,209
合 計	11,509	12,238	3,152	8,357	12,238	12,238	12,452	3,464	8,774	12,452

●貸出金償却額

(単位：百万円)

項 目	平成 17 年度	平成 18 年度
貸 出 金 償 却 額	8,025	4,243

- (注) 1. 貸出金償却額は貸倒引当金相殺前の金額を表示しています。
 2. 貸出金償却額には、債務保証に基づき代位弁済を行ったことにより発生する求償権及び税務上の損金経理に伴う簿外債権の償却額が含まれています。

◆リスク管理債権等の状況

●リスク管理債権の状況

(単位：百万円、%)

区 分	平成 18 年 3 月末	平成 19 年 3 月末
破 綻 先 債 権 額 (A)	190	758
延 滞 債 権 額 (B)	19,805	18,099
3 カ月 以 上 延 滞 債 権 額 (C)	—	—
貸 出 条 件 緩 和 債 権 額 (D)	5,290	2,830
合 計 (E = A + B + C + D)	25,285	21,687
担 保 ・ 保 証 付 債 権 額 (F)	13,578	9,934
個 別 貸 倒 引 当 金 残 高 (G)	9,287	10,105
控 除 後 残 高 (H = E - F - G)	2,419	1,647
リ ス ク 管 理 債 権 比 率	7.16	6.03

- (注) 1. 破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金です。
 2. 延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予したもの以外の貸出金です。
 3. 3か月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3か月以上遅延している貸出金で、破綻先債権及び延滞債権に該当しないものです。
 4. 貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で、破綻先債権、延滞債権及び3か月以上延滞債権に該当しないものです。
 5. 「担保・保証付債権額」は、リスク管理債権額のうち貯金・定期積金、有価証券及び不動産等の確実な担保付の貸出金並びに農業信用基金協会等確実な保証先による保証付貸出金についての当該担保・保証相当額です。
 6. 「個別貸倒引当金残高」は、「リスク管理債権額」のうち、すでに個別貸倒引当金（間接償却）に繰入れた残高です。
 また、個別貸倒引当金残高は、資産自己査定に基づく回収不能見込額と貸倒実績率等に基づき必要額を引き当てています。
 7. 「控除後残高」は、「リスク管理債権額」から「担保・保証付債権額」及び「個別貸倒引当金残高」を控除した貸出金残高です。
 8. リスク管理債権比率は貸出金に占める比率です。
 9. 担保・保証付債権額のうち、要管理債権（3か月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権）については、要管理先債権に対する根担保を債権毎の残高に応じて按分し割り付けて算出しています。

●金融再生法に基づく開示債権の額と保全状況

(単位：百万円、%)

区 分	平成 18 年 3 月末	平成 19 年 3 月末
破産更生債権及びこれらに準ずる債権(A)	3,464	3,465
危 険 債 権 (B)	16,672	15,575
要 管 理 債 権 (C)	5,290	2,830
合 計 (D = A + B + C)	25,427	21,870
担 保 等 に よ る 保 全 (E)	13,652	10,019
貸 倒 引 当 金 (F)	10,955	11,312
引 当 率 F/(D - E)	93.04	95.45
保 全 率 (E + F) / D	96.78	97.54

- (注) 1. 上記の債権区分は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」（平成10年法律第132号）第6条に基づき、債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として、次のとおり区分したものです。

①破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる

る債権をいいます。

②危険債権

債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいいます。

③要管理債権

3月以上延滞債権で上記①及び②に該当しないもの及び貸出条件緩和債権をいいます。

④正常債権

債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記①から③までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいいます。

2. 引当率=引当額 / (債権額 - 担保等)

保全率= (担保等 + 引当額) / 債権額

3. 担保等による保全率のうち、要管理債権については、要管理先債権に対する根担保を債権毎の残高に応じて按分し割り付けて算出しています。

4. 貸倒引当金については要管理債権の引当である一般貸倒引当金を含んでいます。

●元本補てん契約のある信託に係る貸出金のリスク管理債権の状況

該当する取引はありません。

◆有価証券

●種類別有価証券平均残高

(単位：百万円、%)

種 類	平成17年度		平成18年度		増 減	
	金 額	構成比	金 額	構成比	金 額	構成比
国 債	448,224	53.0	428,915	50.8	△ 19,308	△ 2.2
地 方 債	26,710	3.2	27,333	3.2	622	0.0
短 期 社 債	—	—	—	—	—	—
社 債	96,273	11.4	105,699	12.5	9,425	1.1
株 式	10,169	1.2	11,195	1.3	1,025	0.1
外 国 証 券	141,828	16.8	134,975	16.0	△ 6,853	△ 0.8
そ の 他 の 証 券	121,979	14.4	136,851	16.2	14,871	1.8
合 計	845,187	100.0	844,970	100.0	△ 216	0.0

●商品有価証券種類別平均残高

該当する取引はありません。

●保有有価証券の利回り

(単位：%)

種 類	平成18年3月末	平成19年3月末
国 債	1.52	1.39
地 方 債	1.38	1.41
社 債	1.57	1.62
以上平均	1.52	1.44

●有価証券残存期間別残高

(単位：百万円)

種 類	1年以下	1年超 3年以下	3年超 5年以下	5年超 7年以下	7年超 10年以下	10年超	期間の定め のないもの	合計
平成17年度								
国 債	28,251	40,246	132,677	53,316	98,174	61,555	—	414,221
地 方 債	3,155	4,650	10,964	2,266	6,682	—	—	27,719
短 期 社 債	—	—	—	—	—	—	—	—
社 債	4,151	33,228	23,627	23,636	12,225	—	—	96,869
株 式	—	—	—	—	—	—	19,155	19,155
外 国 証 券	20,523	37,133	48,490	19,368	16,880	3,036	—	145,433
その他の証券	—	4,958	24,897	22,485	26,003	—	71,520	149,865
平成18年度								
国 債	31,384	99,199	71,703	55,721	70,248	71,160	—	399,417
地 方 債	1,635	5,678	9,959	2,643	8,348	—	—	28,265
短 期 社 債	—	—	—	—	—	—	—	—
社 債	18,040	28,020	36,642	21,316	6,112	—	—	110,133
株 式	—	—	—	—	—	—	20,522	20,522
外 国 証 券	14,288	54,350	28,210	19,220	19,285	7,670	—	143,026
その他の証券	—	22,944	20,835	15,218	14,117	—	73,984	147,099

●外貨建資産残高

(単位：百万円)

項目	平成18年3月末	平成19年3月末
外貨建資産残高	45,629	50,185

●有価証券の時価情報等

1. 有価証券

(単位：百万円)

保有区分	平成18年3月末			平成19年3月末		
	取得原価又は償却原価	時 価	評価損益	取得原価又は償却原価	時 価	評価損益
売 買 目 的	—	—	—	—	—	—
満期保有目的	—	—	—	—	—	—
そ の 他	828,430	853,265	24,835	820,064	848,464	28,400
合 計	828,430	853,265	24,835	820,064	848,464	28,400

- (注) 1. 時価は期末日における市場価格等によっています。
2. その他有価証券については時価を貸借対照表価額として計上しています。

2. 金銭の信託

(単位：百万円)

保有区分	平成18年3月末			平成19年3月末		
	取得原価	時 価	評価損益	取得原価	時 価	評価損益
運 用 目 的	29,040	29,099	59	31,040	31,034	△5
満期保有目的	—	—	—	—	—	—
そ の 他	5,000	5,121	121	6,000	6,069	69
合 計	34,040	34,220	180	37,040	37,103	63

- (注) 1. 時価は期末日における市場価格等によっています。
2. 運用目的金銭の信託及びその他金銭の信託については時価を貸借対照表価額として計上しています。
また、運用目的金銭の信託の評価損益については当該期の損益に含まれています。

3. 買入金銭債権

(単位：百万円)

保有区分	平成18年3月末			平成19年3月末		
	取得原価	時 価	評価損益	取得原価	時 価	評価損益
売 買 目 的	—	—	—	—	—	—
満期保有目的	—	—	—	—	—	—
そ の 他	1,500	1,500	—	7,440	7,438	△1
合 計	1,500	1,500	—	7,440	7,438	△1

- (注) 1. 時価は期末日における市場価格等によっています。
2. その他買入金銭債権については時価を貸借対照表価額として計上しています。

4. デリバティブ取引等 (金融先物取引等、金融等デリバティブ取引、有価証券店頭デリバティブ取引)

①金利関連取引

(単位：百万円)

区 分		平成18年3月末			平成19年3月末		
		契約額等	時 価	評価損益	契約額等	時 価	評価損益
取引所	金利先物	売 建	—	—	—	—	—
		買 建	—	—	—	—	—
	金利オプション	売 建	—	—	—	—	—
		買 建	—	—	—	—	—
店頭	金利スワップ	受取固定 支払変動	—	—	—	—	—
		受取変動 支払固定	60	△31	△31	60	△10
	金利オプション	売 建	—	—	—	—	—
		買 建	—	—	—	—	—
計		60	△31	△31	60	△10	△10

②通貨関連取引、株式関連取引、債券関連取引

該当する取引はありません。

◆ 損益の状況

● 最近の5事業年度の主要な経営指標

(単位：百万円、千口、人、%)

項 目	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
経常収益	33,102	32,333	36,498	38,323	40,715
経常利益	2,603	3,043	3,279	5,724	6,687
当期剰余金	2,421	2,321	2,401	3,969	6,123
出資金 (出資口数)	13,465 (2,693)	13,967 (2,793)	23,452 (4,690)	27,862 (5,572)	28,507 (5,701)
資本額	126,925	125,593	136,022	144,073	—
純資産額	—	—	—	—	148,416
総資産額	2,137,807	2,187,307	2,227,556	2,247,678	2,280,402
貯金等残高	1,988,469	2,038,426	2,070,536	2,078,028	2,086,758
預け金残高	952,752	921,966	940,144	935,963	957,866
貸出金残高	351,307	350,679	347,610	353,351	359,758
有価証券残高	737,528	813,473	852,748	853,265	848,464
剰余金配当金額	3,880	3,619	3,397	4,841	4,902
普通出資配当額	314	320	326	334	341
後配出資配当額	40	45	99	188	251
事業分量配当額	3,525	3,254	2,971	4,318	4,309
職員数	300	295	284	277	280
単体自己資本比率 (旧基準)	15.64	14.54	14.99	15.14	—
単体自己資本比率 (新基準)	—	—	—	—	19.24

- (注) 1. 「農業協同組合法施行規則」(平成17年農林水産省令第27号)別紙様式が「農業協同組合法施行規則の一部を改正する省令」(農林水産省令第41号平成18年4月28日)により改正され、平成18年5月1日から施行されたことに伴い、従来の「資本の部」が今年度から「純資産の部」に改正されたことから、「資本額」と「純資産額」を区分して記載しています。
2. 自己資本比率算出基準が改正され、今年度から新基準(金融庁・農林水産省告示第2号「農業協同組合等がその経営の健全性を判断するための基準」)に基づき算出しています。
3. 総資産額について前年度までは債務保証見返を控除して記載していましたが、今年度より債務保証見返を含めて記載しています。

● 業務純益

(単位：百万円)

項 目	平成17年度	平成18年度	増 減
業 務 純 益	8,045	3,674	△4,371

- (注) 1. 業務純益＝事業収益－(事業費用－金銭の信託運用見合費用)－一般貸倒引当金純繰入額
2. 金銭の信託運用見合費用＝金銭の信託平均残高×資金調達勘定利回り
 資金調達勘定利回り＝資金調達費用(貯金利息＋譲渡性貯金利息＋売現先利息＋債券貸借取引支払利息＋借入金利息＋金利スワップ支払利息＋その他支払利息(支払雑利息等))／資金調達勘定平均残高(貯金＋譲渡性貯金＋売現先勘定＋債券貸借取引受入担保金＋借入金＋その他(貸付留保金、従業員預り金等))×100
3. 金銭の信託運用見合費用の算出において、前年度までは貯金借用金原価率を使用していましたが、今年度より資金調達勘定利回りを使用しています。

● 利益総括表

(単位：百万円、%)

項 目	平成17年度	平成18年度	増 減
資 金 運 用 収 支	12,904	11,567	△1,336
資 金 運 用 収 益	26,009	26,458	449
資 金 調 達 費 用	13,104	14,890	1,786
役 務 取 引 等 収 支	206	64	△141
役 務 取 引 等 収 益	468	444	△24
役 務 取 引 等 費 用	261	379	117
そ の 他 事 業 収 支	△147	△3,106	△2,958
そ の 他 事 業 収 益	3,198	1,932	△1,265
そ の 他 事 業 費 用	3,346	5,038	1,692
事 業 粗 利 益	12,964	8,526	△4,437
事 業 粗 利 益 率	0.60	0.39	△0.21

- (注) 1. 資金運用収支＝資金運用収益－(資金調達費用－金銭の信託運用見合費用)
2. 本表記載の「資金調達費用」は金銭の信託運用見合費用を控除して記載しています。
3. 金銭の信託運用見合費用＝金銭の信託平均残高×資金調達勘定利回り
 資金調達勘定利回り＝資金調達費用(貯金利息＋譲渡性貯金利息＋売現先利息＋債券貸借取引支払利息＋借入金利息＋金利スワップ支払利息＋その他支払利息(支払雑利息等))／資金調達勘定平均残高(貯金＋譲渡性貯金＋売現先勘定＋債券貸借取引受入担保金＋借入金＋その他(貸付留保金、従業員預り金等))×100
4. 役務取引等収支＝役務取引等収益－役務取引等費用
5. その他事業収支＝その他事業収益－その他事業費用
6. 事業粗利益＝資金運用収支＋役務取引等収支＋その他事業収支
7. 事業粗利益率＝事業粗利益／資金運用勘定平均残高×100
8. 金銭の信託運用見合費用の算出において、前年度までは貯金借用金原価率を使用していましたが、今年度より資金調達勘定利回りを使用しています。

●資金運用収支の内訳

(単位：百万円、%)

項 目	平成17年度			平成18年度		
	平均残高	利 息	利回り	平均残高	利 息	利回り
資 金 運 用 勘 定	2,163,713	26,009	1.20	2,168,104	26,458	1.22
うち 預 け 金	964,228	7,625	0.79	973,014	8,896	0.91
うち 有 価 証 券	845,187	13,638	1.61	844,970	12,658	1.50
うち 貸 出 金	352,087	4,724	1.34	346,512	4,864	1.40
資 金 調 達 勘 定	2,073,947	13,104	0.63	2,086,082	14,890	0.71
うち 貯 金	2,104,820	13,297	0.63	2,116,063	15,092	0.71
うち 譲 渡 性 貯 金	1,130	0	0.05	905	0	0.06
うち 借 用 金	—	—	—	2,575	27	1.05
総 資 金 利 ざ や			0.33			0.27

(注) 1. 総資金利ざや=資金運用利回り-資金調達原価率

資金調達原価率=(資金調達費用(貯金利息+譲渡性貯金利息+売現先利息+債券貸借取引支払利息+借入金利息+金利スワップ支払利息+その他支払利息(支払雑利息等))+経費-金銭の信託運用見合費用)/(貯金+譲渡性貯金+売現先勘定+債券貸借取引受入担保金+借入金+その他(貸付留保金、従業員預り金等)-金銭の信託運用見合額)×100

2. 資金運用勘定の「うち預け金」の利息には、受取奨励金及び受取特別配当金が含まれています。
3. 資金調達勘定の「うち貯金」の利息には、支払奨励金が含まれています。
4. 資金調達勘定の平均残高及び利息は金銭の信託運用見合額及び金銭の信託運用見合費用を控除しています。

●受取・支払利息の増減額

(単位：百万円)

項 目	17年度増減額	18年度増減額
受 取 利 息	1,193	449
うち 預 け 金	171	1,271
うち コ ー ル ロ ー ン	—	—
うち 有 価 証 券	1,136	△980
うち 貸 出 金	△98	140
支 払 利 息	302	1,786
うち 貯 金	236	1,794
うち 譲 渡 性 貯 金	0	0
うち 借 用 金	—	27
差 引	891	△1,336

(注) 1. 増減額は前年度対比です。

2. 受取利息の「うち預け金」には、受取奨励金及び受取特別配当金が含まれています。
3. 支払利息の「うち貯金」には、支払奨励金が含まれています。
4. 支払利息の増減額は金銭の信託運用見合費用控除後の支払利息額の増減額です。

●経費の内訳

(単位：百万円)

項 目	平成17年度	平成18年度
人 件 費	2,242	2,227
給 料 手 当 等	1,693	1,716
福 利 厚 生 費	292	301
退 職 給 付 費 用	143	105
役 員 退 任 給 与 引 当 金 繰 入 額	13	13
賞 与 引 当 金 繰 入 額	98	90
物 件 費	2,540	2,495
事 業 推 進 費	454	447
債 権 管 理 費	59	51
旅 費 交 通 費	44	48
業 務 費	773	802
負 担 金	681	506
施 設 費	515	616
雑 費	10	21
税 金	135	129
経 費 合 計	4,918	4,852

◆ その他の諸指標

● 利益率、経営諸指標

(単位：百万円、%)

区 分	平成17年度	平成18年度	増 減
貯 貸 率 (期 末)	17.0	17.2	0.2
(期中平均)	16.7	16.4	△0.3
貯 証 率 (期 末)	41.1	40.7	△0.4
(期中平均)	40.1	39.9	△0.2
一従業員当り貯金平均残高	7,312	7,274	△37
一従業員当り貸出金平均残高	1,222	1,190	△31
一店舗当り貯金平均残高	300,850	302,424	1,573
一店舗当り貸出金平均残高	50,298	49,501	△796
総資産経常利益率	0.25	0.30	0.05
総資産当期純利益率	0.18	0.27	0.09
純資産経常利益率	4.34	4.97	0.63
純資産当期純利益率	3.01	4.55	1.54

- (注) 1. 貯金には譲渡性が含まれています。
 2. 一従業員・一店舗当たり貸出金平均残高にはコールローンが含まれています。
 3. 貯貸率(期 末) = 貸出金残高 / 貯金残高 × 100
 4. 貯貸率(期中平均) = 貸出金平均残高 / 貯金平均残高 × 100
 5. 貯証率(期 末) = 有価証券残高 / 貯金残高 × 100
 6. 貯証率(期中平均) = 有価証券平均残高 / 貯金平均残高 × 100
 7. 総資産経常利益率 = 経常利益 / 総資産 (債務保証見返を除く) 平均残高 × 100
 8. 総資産当期純利益率 = 当期剰余金 (税引後) / 総資産 (債務保証見返を除く) 平均残高 × 100
 9. 純資産経常利益率 = 経常利益 / 純資産勘定平均残高 × 100
 10. 純資産当期純利益率 = 当期剰余金 (税引後) / 純資産勘定平均残高 × 100
 11. 総資産経常利益率、総資産当期純利益率について前年度までは債務保証見返を含めて算出していましたが、今年度より債務保証見返を控除して算出しています。

● 出資金の推移

(単位：百万円、千口)

区 分	平成15年3月末	平成16年3月末	平成17年3月末	平成18年3月末	平成19年3月末
出 資 金	13,465	13,967	23,452	27,862	28,507
(うち後配出資金)	(2,791)	(3,072)	(12,310)	(16,466)	(16,880)
(出資口数)	(2,693)	(2,793)	(4,690)	(5,572)	(5,701)
回 転 出 資 金	18,260	16,989	15,261	14,015	14,010
合 計	31,725	30,957	38,714	41,878	42,518

◆ 代理業務

● 代理貸付残高

(単位：百万円)

金融機関等	平成18年3月末	平成19年3月末
農林漁業金融公庫	33,255	31,048
独立行政法人住宅金融支援機構	87,929	77,452
独立行政法人福祉医療機構	3,280	2,826
国民生活金融公庫	1,974	1,931
独立行政法人農業者年金基金	10	8
計	126,450	113,268

◆ 自動機

● 現金自動機器設置台数

(平成19年3月31日現在)

区分	台数	
信連設置	ATM	8
	うちICカード・生体認証対応	7
JA設置	ATM	460
	うちICカード・生体認証対応	231

ATM……現金自動預入・支払機

◆ 自己資本の充実の状況

● 自己資本の充実の状況(単体)

1. 自己資本の状況

◇ 自己資本比率の状況

当会では、多様化するリスクに対応するとともに、会員や利用者のニーズに応えるため、財務基盤の強化を経営の重要課題として取り組んでいます。内部留保の増加に努めるとともに、不良債権処理および業務の効率化等に取り組んだ結果、平成19年3月末における自己資本比率は、19.24%となりました。

◇ 経営の健全性の確保と自己資本の充実

当会の自己資本は会員からの普通出資のほか、回転出資金、後配出資金により調達しています。

○普通出資による資本調達額 116億円 (前年度113億円)

○回転出資金による資本調達額 183億円 (前年度183億円)

○後配出資による資本調達額 173億円 (前年度168億円)

当会では、将来的な信用リスクや金利リスクの増加に備え、安定的な自己資本比率の維持に努めるため、自己資本増強策として劣後特約付借入金により18年度に200億円の調達を行い、19年度に100億円の調達を予定しています。

また、自己資本比率の算出にあたっては、「自己資本比率算出要領」及び「自己資本比率算出事務手続」を制定し、適正なプロセスにより正確な自己資本比率を算出しています。また、これに基づき、当会における信用リスクやオペレーショナル・リスクに対応した十分な自己資本の維持に努めています。

(1) 単体自己資本の構成

単体自己資本の構成(旧基準)

(単位:百万円)

項 目	平成17年度	平成18年度	項 目	平成17年度	平成18年度
(自己資本)			自己資本総額 (A+B) (C)	132,113	—
出資金	46,610	—	他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額	5,000	—
うち後配出資金	16,880	—	負債性資本調達手段及びこれに準ずるもの	—	—
うち回転出資金	18,333	—	期限付劣後債務及びこれらに準ずるもの	5,000	—
再評価積立金	31	—	控除項目不算入額	△2,679	—
資本準備金	0	—	控除項目計 (D)	2,320	—
利益準備金	28,300	—			
任意積立金	49,500	—	自己資本額 (C-D) (E)	129,793	—
次期繰越剰余金	2,317	—			
その他有価証券の評価差損	—	—			
処分未済持分	—	—	資産(オン・バランス)項目	849,502	—
営業権相当額	—	—	オフ・バランス取引項目	7,258	—
基本的項目 (A)	126,758	—	リスク・アセット等計 (F)	856,760	—
土地の再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の45%に相当する額	—	—			
一般貸倒引当金	2,841	—			
相互援助積立金	5,193	—			
負債性資本調達手段等	—	—			
負債性資本調達手段	—	—			
期限付劣後債務	—	—			
補完的項目不算入額	△2,679	—	Tier1比率 (A/F)	14.79%	—
補完的項目 (B)	5,354	—	自己資本比率 (E/F)	15.14%	—

単体自己資本の構成(新基準)

(単位:百万円)

項 目	平成17年度	平成18年度	項 目	平成17年度	平成18年度
出資金	—	28,978	他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額	—	5,000
うち後配出資金	—	17,350	負債性資本調達手段及びこれに準ずるもの	—	—
回転出資金	—	18,319	期限付劣後債務及びこれに準ずるもの	—	5,000
再評価積立金	—	31	非同時決済取引に係る控除額及び信用リスク削減手法として用いる保証又はクレジット・デリバティブの免責額に係る控除額	—	—
資本準備金	—	0	基本的項目からの控除分を除く、自己資本控除とされる証券化エクスポージャー及び信用補完機能を持つI/Oストリップ	—	1,127
利益準備金	—	29,600	控除項目不算入額	—	△2,643
経営基盤安定化積立金	—	500	控除項目計(D)	—	3,484
特別積立金	—	49,500	自己資本額(C-D)(E)	—	150,055
次期繰越剰余金	—	1,737			
処分未済持分	—	—	資産(オン・バランス)項目	—	745,713
その他有価証券の評価差損	—	—	オフ・バランス取引等項目	—	8,955
営業権相当額	—	—	オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額	—	24,859
企業結合により計上される無形固定資産相当額	—	—	リスク・アセット等計(F)	—	779,528
証券化取引により増加した自己資本に相当する額	—	—			
基本的項目(A)	—	128,667	Tier1比率(A/F)	—	16.50%
			自己資本比率(E/F)	—	19.24%
土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	—	—			
一般貸倒引当金	—	2,242			
相互援助積立金	—	5,273			
負債性資本調達手段等	—	20,000			
負債性資本調達手段	—	20,000			
期限付劣後債務	—	—			
補完的項目不算入額	—	△2,643			
補完的項目(B)	—	24,872			
自己資本総額(A+B)(C)	—	153,539			

(注) 1. 農協法第11条の2の規定に基づく組合の経営の健全性を判断するための基準に係る算式に基づき算出しています。なお、当会は国内基準を採用しています。

2. 当会は、信用リスク・アセット額の算出にあたっては標準的手法を、適格金融資産担保の適用については信用リスク削減手法の簡便手法を、オペレーショナル・リスク相当額の算出にあたっては基礎的手法を採用しています。

基礎的手法とは、1年間の粗利益に0.15を乗じた額の直近三年間の平均値によりオペレーショナル・リスク相当額を算出する方法です。

なお、1年間の粗利益は、経常利益から国債等債券売却益・償還益及びその他経常収益を控除し、役員取引等費用、国債等債券売却損・償還損・償却、経費、その他経常費用及び金銭の信託運用費用を加算して算出しています。

(2) 自己資本の充実度

a 信用リスクに対する所要自己資本の額及びポートフォリオごとの額

(単位:百万円)

項 目	平成17年度			平成18年度		
	エクスポージャーの 期末残高	リスク・アセット額 a	所要自己資本額 b=a×4%	エクスポージャーの 期末残高	リスク・アセット額 a	所要自己資本額 b=a×4%
我が国の中央政府及び 中央銀行向け	—	—	—	401,970	—	—
我が国の地方公共団体向け	—	—	—	32,276	—	—
我が国の政府関係機関向け	—	—	—	18,229	1,662	66
地方三公社向け	—	—	—	2,181	410	16
金融機関及び証券会社向け	—	—	—	1,169,625	298,118	11,924
法人等向け	—	—	—	343,682	202,539	8,101
中小企業等向け及び 個人向け	—	—	—	3,159	2,187	87
抵当権付住宅ローン	—	—	—	1,275	445	17
不動産取得等事業向け	—	—	—	3,913	3,323	132
三月以上延滞等	—	—	—	5,785	2,915	116
信用保証協会等及び 株式会社産業再生機構に よる保証付	—	—	—	383	38	1
出資等	—	—	—	164,942	163,981	6,559
複数の資産を裏付とする 資産(所謂ファンド)のうち、 個々の資産の把握が困難 な資産	—	—	—	24,980	40,471	1,618
証券化	—	—	—	25,093	10,509	420
上記以外	—	—	—	91,420	28,064	1,122
合計	—	—	—	2,288,919	754,668	30,186

- (注) 1. 「エクスポージャー」とは、資産(派生商品取引によるものを除く)並びにオフバランス取引及び派生商品取引の与信相当額です。
 2. 「三月以上延滞等」とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3カ月以上延滞している債務者に係るエクスポージャー及び「金融機関及び証券会社向け」、「法人等向け」等においてリスク・ウェイトが150%になったエクスポージャーのことです。
 3. 「証券化」とは、原資産にかかる信用リスクを優先劣後構造のある二以上のエクスポージャーに階層化し、その一部または全部を第三者に移転する性質を有する取引のことです。
 4. 「上記以外」には、現金・外国の中央政府及び中央銀行向け・国際決済銀行等向け・外国の中央政府等以外の公共部門向け・国際開発銀行向け・取立未済手形・未決済取引・その他の資産(固定資産等)が含まれます。
 5. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

b オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額

(単位:百万円)

項 目	平成17年度		平成18年度	
	オペレーショナル・リスク 相当額を8%で除した額 a	所要自己資本額 b=a×4%	オペレーショナル・リスク 相当額を8%で除した額 a	所要自己資本額 b=a×4%
オペレーショナル・リスク に対する所要自己資本額	—	—	24,859	994

- (注) 1. オペレーショナル・リスク相当額の算出にあたり、当会では基礎的手法を採用しています。
 <オペレーショナル・リスク相当額を8%で除した額の算出方法(基礎的手法)>

$$\frac{\text{粗利益(直近3年間のうち正の値の合計額)} \times 15\%}{\text{直近3年間のうち粗利益が正の値であった年数}} \div 8\%$$

 2. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

c 単体自己資本比率の分母の額に4%を乗じた額

(単位:百万円)

項 目	平成17年度		平成18年度	
	リスク・アセット(分母)合計 a	所要自己資本額 b=a×4%	リスク・アセット(分母)合計 a	所要自己資本額 b=a×4%
所要自己資本額	856,760	34,270	779,528	31,181

2. 信用リスクに関する事項

◇リスク管理の方針及び手続の概要

当会では、リスクを確実に認識し、評価・計測し、報告するための態勢として、リスク管理に関する規程類を整備しています。

信用リスクとは、取引先が倒産し、債務不履行となり損失を被るリスクのことです。当会では信用リスクを与信に付帯する本源的なリスクと位置づけ、信用リスク管理の方針及び手続を定めて適切に管理しています。

信用リスク取引にかかる融資方針に基づく管理方針等は、信用リスク管理部署が策定し、融資マネジメント委員会およびリスク管理委員会で審議のうえ理事会において決定しています。

与信審査については、フロント・営業セクションから独立した審査所管部を設置し、個別内部格付の決定、個別与信審査、大口与信等の信用状況のモニタリング、自己査定における第二次査定の実施を通じて、デフォルト等に伴う損失を最小限に抑え適正なリターンの確保を図っています。

また、経営層によって構成されるリスク管理委員会を毎月開催し、当会が保有するリスク内容および対応方針を決定しています。

当会における貸倒引当金の計上は、「資産の償却・引当細則」に基づき計上しています。

〈貸倒引当金算定方法の概要〉

【一般貸倒引当金】

正常先、要管理先、その他の要注先それぞれのそれぞれに対する債権について、過去の実績率に基づき算出した将来発生が見込まれる損失に係る貸倒引当金としています。なお、一般貸倒引当金繰入額の合計額が税法基準で容認される限度額を下回るときは、税法基準により算出した金額を繰り入れています。

○正常先

1年を一つの期間とみなす過去3算定期間の貸倒実績率の平均値に基づき、今後1年間の予想損失額以上を見積り計上しています。

○要管理先

3年を一つの期間とみなす過去3算定期間の貸倒実績率の平均値に基づき、今後3年間の予想損失額以上を見積り計上しています。

○その他の要注先

正常先に準じて計上しています。

【個別貸倒引当金】

破綻懸念先、実質破綻先および破綻先に対する債権について、損失が見込まれるⅢ分類および回収が不可能なⅣ分類に係る個別の貸倒引当金としています。

○破綻懸念先

3年を一つの期間とみなす過去3算定期間の貸倒実績率の平均値に基づき、過去の損失率の実績を算出し、これに将来の損失発生見込みに係る必要な修正を行って、今後の一定期間における予想損失額を見積り計上しています。

○実質破綻先・破綻先

自己査定の結果発生したⅢ分類およびⅣ分類について、全額を個別貸倒引当金への繰入または償却を行っています。

※Ⅲ分類資産

最終の回収または価値について重大な懸念が存し、従って、損失の発生の可能性が高いが、その損失額について合理的な推計が困難な資産

※Ⅳ分類資産

回収不可能または無価値と判定される資産

◇標準的手法に関する事項

当会では、自己資本比率算出にかかる信用リスク・アセット額は告示に定める標準的手法により算出しています。また、信用リスク・アセットの算出におけるリスク・ウェイトの判定に当たり使用する格付等は次のとおりです。

- ①リスク・ウェイトの判定に当たり使用する格付は、以下の適格格付機関による依頼格付のみ使用し、非依頼格付は使用しないこととしています。

適格格付機関
株式会社格付投資情報センター(R&I)
株式会社日本格付研究所(JCR)
ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク(Moody's)
スタンダード・アンド・プアーズ・レーティング・サービス(S&P)
フィッチレーティングスリミテッド(Fitch)

- ②リスク・ウェイトの判定に当たり使用するエクスポージャーごとの適格格付機関の格付またはカントリー・リスク・スコア

エクスポージャー	適格格付機関	カントリー・リスク・スコア
中央政府および中央銀行		日本貿易保険
国際開発銀行向けエクスポージャー	R&I, Moody's, JCR, S&P, Fitch	
金融機関向けエクスポージャー		日本貿易保険
法人等向けエクスポージャー(長期)	R&I, Moody's, JCR, S&P, Fitch	
法人等向けエクスポージャー(短期)	R&I, Moody's, JCR, S&P, Fitch	

(1) 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及び主な種類別の内訳

(単位:百万円)

項目	平成17年度				平成18年度			
	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ
信用リスク期末残高計	2,205,286	378,300	724,242	0	2,263,825	393,379	656,408	—
信用リスク平均残高計	—	—	—	—	—	—	—	—

- (注) 1. 信用リスクに関するエクスポージャーの残高には、資産(自己資本控除となるもの、派生商品取引によるもの、証券化エクスポージャーに該当するものを除く)並びにオフバランス取引及び派生商品取引の与信相当額を含みます。
 2. 「うち貸出金等」には、貸出金のほか、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランスシート・エクスポージャーを含んでいます。なお、コミットメントとは、契約した期間・融資枠の範囲内で、お客さまのご請求に基づき、金融機関が融資を実行することを約束する契約における融資可能残額のことです。
 3. 「店頭デリバティブ」とは、株式や金利、為替などの通常の取引から派生した比較的小さな金額で仮想的に大きな原資産を取引する金融商品取引のうち、金融機関や証券会社の店頭で相対で行われる取引のことです。
 4. 本開示は、平成18年度以降適用される新自己資本比率規制に対応しているため、期中平均残高の計数を算出していません。

(2) 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及び主な種類別の内訳

a 地域別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度				平成18年度			
	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ
国 内	2,162,084	378,300	681,040	0	2,131,567	392,365	566,501	—
国 外	43,201	—	43,201	—	132,258	1,013	89,907	—
合 計	2,205,286	378,300	724,242	0	2,263,825	393,379	656,408	—

- (注) 1. エクスポージャーの残高には、資産（自己資本控除となるもの、派生商品取引によるもの、証券化エクスポージャーに該当するものを除く）並びにオフバランス取引及び派生商品取引の与信相当額を含みます。
2. 「うち貸出金等」には、貸出金のほか、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランスシート・エクスポージャーを含んでいます。なお、コミットメントとは、契約した期間・融資枠の範囲内で、お客さまのご請求に基づき、金融機関が融資を実行することを約束する契約における融資可能残額のことです。
3. 「店頭デリバティブ」とは、株式や金利、為替などの通常の取引から派生した比較的小さな金額で仮想的に大きな原資産を取引する金融商品取引のうち、金融機関や証券会社の店頭で相対で行われる取引のことです。

b 業種別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度				平成18年度				
	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ	
法人	農業	—	—	—	1,092	1,092	—	—	
	林業	—	—	—	—	—	—	—	
	水産業	—	—	—	—	—	—	—	
	製造業	—	—	—	—	90,246	56,190	25,894	—
	鉱業	—	—	—	—	108	—	—	—
	建設・不動産業	—	—	—	—	31,416	30,850	78	—
	電気・ガス・熱供給・水道業	—	—	—	—	17,146	3,690	12,584	—
	運輸・通信業	—	—	—	—	32,214	23,395	7,730	—
	金融・保険業	—	—	—	—	1,177,299	108,355	110,944	—
	卸売・小売・飲食・サービス業	—	—	—	—	134,600	125,659	7,795	—
	日本国政府・地方公共団体	—	—	—	—	431,276	3,980	427,296	—
	その他	—	—	—	—	199,854	29,022	64,084	—
	個 人	—	—	—	—	11,147	11,143	—	—
その他	—	—	—	—	137,423	—	—	—	
合 計	—	—	—	—	2,263,825	393,379	656,408	—	

- (注) 1. エクスポージャーの残高には、資産（自己資本控除となるもの、派生商品取引によるもの、証券化エクスポージャーに該当するものを除く）並びにオフバランス取引及び派生商品取引の与信相当額を含みます。
2. 「うち貸出金等」には、貸出金のほか、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランスシート・エクスポージャーを含んでいます。なお、コミットメントとは、契約した期間・融資枠の範囲内で、お客さまのご請求に基づき、金融機関が融資を実行することを約束する契約における融資可能残額のことです。
3. 「店頭デリバティブ」とは、株式や金利、為替などの通常の取引から派生した比較的小さな金額で仮想的に大きな原資産を取引する金融商品取引のうち、金融機関や証券会社の店頭で相対で行われる取引のことです。
4. 「その他」には、ファンドのうち個々の資産の把握が困難な資産や固定資産等が該当します。
5. 17年度の計数については、業種別の信用リスクに関するエクスポージャーの残高を管理していないため、開示していません。

c 残存期間別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度				平成18年度			
	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ	信用リスクに関するエクスポージャーの残高	うち貸出金等	うち債券	うち店頭デリバティブ
1年以下	—	—	—	—	1,103,846	88,500	52,395	—
1年超3年以下	—	—	—	—	238,786	58,144	155,385	—
3年超5年以下	—	—	—	—	212,501	73,185	131,399	—
5年超7年以下	—	—	—	—	159,462	61,728	94,925	—
7年超10年以下	—	—	—	—	174,455	70,004	102,830	—
10年超	—	—	—	—	105,164	26,210	78,953	—
期限の定めのないもの	—	—	—	—	269,608	15,604	40,518	—
合 計	—	—	—	—	2,263,825	393,379	656,408	—

- (注) 1. エクスポージャーの残高には、資産（自己資本控除となるもの、派生商品取引によるもの、証券化エクスポージャーに該当するものを除く）並びにオフバランス取引及び派生商品取引の与信相当額を含みます。
2. 「うち貸出金等」には、貸出金のほか、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランスシート・エクスポージャーを含んでいます。なお、コミットメントとは、契約した期間・融資枠の範囲内で、お客さまのご請求に基づき、金融機関が融資を実行することを約束する契約における融資可能残額のことです。
3. 「店頭デリバティブ」とは、株式や金利、為替などの通常の取引から派生した比較的小さな金額で仮想的に大きな原資産を取引する金融商品取引のうち、金融機関や証券会社の店頭で相対で行われる取引のことです。
4. 17年度の計数については、残存期間別の信用リスクに関するエクスポージャーを管理していないため、開示していません。

(3) 三月以上延滞エクスポージャーの期末残高

a 地域別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度	平成18年度
国 内	—	5,785
国 外	—	—
合 計	—	5,785

- (注) 1. 「三月以上延滞エクスポージャー」には、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3カ月以上延滞しているエクスポージャーのほか、「金融機関及び証券会社向け」、「法人等向け」等においてリスク・ウェイトが150%になったエクスポージャーを含んでいます。
2. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

b 業種別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度	平成18年度	
法人	農業	—	
	林業	—	
	水産業	—	
	製造業	—	117
	鉱業	—	—
	建設・不動産業	—	20
	電気・ガス・熱供給・水道業	—	—
	運輸・通信業	—	168
	金融・保険業	—	—
	卸売・小売・飲食・サービス業	—	4,691
	その他	—	—
個 人	—	787	
合 計	—	5,785	

- (注) 1. 「三月以上延滞エクスポージャー」には、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3カ月以上延滞しているエクスポージャーのほか、「金融機関及び証券会社向け」、「法人等向け」等においてリスク・ウェイトが150%になったエクスポージャーを含んでいます。
2. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

(4) 貸倒引当金の期末残高及び期中増減額

a 種類別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度					平成18年度				
	期首残高	期中増加額	期中減少額		期末残高	期首残高	期中増加額	期中減少額		期末残高
			目的使用	その他				目的使用	その他	
一般貸倒引当金	4,134	2,841	—	4,134	2,841	2,841	2,242	—	2,841	2,242
個別貸倒引当金	7,374	9,396	3,152	4,222	9,396	9,396	10,209	3,464	5,932	10,209

b 地域別

当会では、国外への貸出を行っていないため、地域別（国内・国外）の開示を省略しています。

c 業種別

(単位:百万円)

区 分	平成17年度				平成18年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
法人	農業	18	17	18	17	28	17	28
	林業	—	—	—	—	—	—	—
	水産業	—	—	—	—	—	—	—
	製造業	44	20	44	20	20	29	29
	鉱業	—	—	—	—	—	—	—
	建設・不動産業	114	227	114	227	227	97	227
	電気・ガス・熱供給・水道業	—	—	—	—	—	—	—
	運輸・通信業	2,234	2,050	2,234	2,050	2,050	1,131	2,050
	金融・保険業	—	—	—	—	—	—	—
	卸売・小売・飲食・サービス業	4,186	6,468	4,186	6,468	6,468	7,648	6,468
その他	—	—	—	—	—	—	—	—
個人	775	611	775	611	611	1,274	611	1,274
合計	7,374	9,396	7,374	9,396	9,396	10,209	9,396	10,209

(注) 一般貸倒引当金については業種別の算定を行っていないため、個別貸倒引当金のみ記載しています。

(5) 業種別の貸出金償却の額

(単位:百万円)

区 分		平成17年度	平成18年度
法人	農業	—	—
	林業	—	—
	水産業	—	—
	製造業	—	16
	鉱業	—	—
	建設・不動産業	80	184
	電気・ガス・熱供給・水道業	—	—
	運輸・通信業	1,843	1,987
	金融・保険業	—	—
	卸売・小売・飲食・サービス業	5,499	1,778
	その他	—	—
個人	399	255	
合計	7,823	4,222	

(6) リスク・ウェイト区分ごとの信用リスク削減効果勘案後の残高等

(単位:百万円)

区 分	平成17年度			平成18年度			
	格付あり	格付なし	計	格付あり	格付なし	計	
信用リスク削減効果勘案後残高	0%	—	—	—	494,703	494,703	
	10%	—	—	—	17,011	17,011	
	20%	—	—	—	92,049	1,106,882	1,198,932
	35%	—	—	—	—	1,273	1,273
	50%	—	—	—	97,976	14,282	112,259
	75%	—	—	—	—	3,025	3,025
	100%	—	—	—	25,457	393,148	418,605
	150%	—	—	—	—	10,401	10,401
	その他	—	—	—	—	7,611	7,611
自己資本控除	—	—	—	—	—	—	
合計	—	—	—	215,484	2,048,341	2,263,825	

(注) 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

3. 信用リスク削減手法に関する事項

◇信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針及び手続の概要

「信用リスク削減手法」とは、自己資本比率算出における信用リスク・アセット額の算出において、エクスポージャーに対して一定の要件を満たす担保や保証等が設定されている場合に、エクスポージャーのリスク・ウェイトに代え、担保や保証人に対するリスク・ウェイトを適用するなど信用リスク・アセット額を軽減する方法です。

当会では、信用リスク削減手法を「自己資本比率算出要領」にて定めています。

信用リスク削減手法として、「適格金融資産担保」、「保証」、「貸出金と自会貯金の相殺」を適用しています。

適格金融資産担保付取引とは、エクスポージャーの信用リスクの全部または一部が、取引相手または取引相手のために第三者が提供する適格金融資産担保によって削減されている取引をいいます。

適格金融資産担保取引について、信用リスク削減手法の簡便手法を用いています。

保証については、被保証債権の債務者よりも低いリスク・ウェイトが適用される中央政府等、本邦地方公共団体、本邦政府関係機関、外国の中央政府以外の公共部門、国際開発銀行、および金融機関または証券会社、これら以外の主体で長期格付がA-またはA3以上の格付を付与しているものを適格保証人

とし、エクスポージャーのうち適格保証人に保証された被保証部分について、被保証債権のリスク・ウェイトに代えて、保証人のリスク・ウェイトを適用しています。

貸出金と自会貯金の相殺については、①取引相手の債務超過、破産手続開始の決定その他これらに類する事由にかかわらず、貸出金と自会貯金の相殺が法的に有効であることを示す十分な根拠を有していること、②同一の取引相手との間で相殺契約下にある貸出金と自会貯金をいずれの時点においても特定することができること、③自会貯金が継続されないリスクが、監視および管理されていること、④貸出金と自会貯金の相殺後の額が、監視および管理されていること、の条件をすべて満たす場合に、相殺契約下にある貸出金と自会貯金の相殺後の額を信用リスク削減手法適用後のエクスポージャー額としています。

(1) 標準的手法において信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャー

(単位:百万円)

項目	平成17年度			平成18年度		
	適格金融 資産担保	保証	クレジット・ デリバティブ	適格金融 資産担保	保証	クレジット・ デリバティブ
我が国の政府関係機関向け	—	—	—	—	1,599	—
地方三公社向け	—	—	—	—	124	—
金融機関及び証券会社向け	—	—	—	—	—	—
法人等向け	—	—	—	2,461	12,439	—
中小企業等向け及び個人向け	—	—	—	16	—	—
抵当権付住宅ローン	—	—	—	—	—	—
不動産取得等事業向け	—	—	—	—	—	—
三月以上延滞等	—	—	—	—	—	—
証券化	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	80	551	—
合計	—	—	—	2,557	14,714	—

- (注) 1. 「エクスポージャー」とは、資産（派生商品取引によるものを除く）並びにオフバランス取引及び派生商品取引の与信相当額です。
 2. 「三月以上延滞等」とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3カ月以上延滞している債務者に係るエクスポージャー及び「金融機関及び証券会社向け」、「法人等向け」等においてリスク・ウェイトが150%になったエクスポージャーのことです。
 3. 「証券化」とは、原資産にかかる信用リスクを優先劣後構造のある二以上のエクスポージャーに階層化し、その一部または全部を第三者に移転する性質を有する取引のことです。
 4. 「その他」には、現金・外国の中央政府及び中央銀行向け・国際決済銀行等向け・外国の中央政府等以外の公共部門向け・国際開発銀行向け・取立未済手形・未決済取引・その他の資産（固定資産等）が含まれます。
 5. 「クレジット・デリバティブ」とは、信用リスクをヘッジ（回避・低減）するために、債務者である会社等の信用力を指標に将来受け渡す損益を決める取引です。
 6. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

4. 派生商品取引及び長期決済期間取引のリスクに関する事項

◇派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針及び手続の概要

「派生商品取引」とは、その価格(現在価値)が他の証券・商品(原資産)の価格に依存して決定される金融商品(先物、オプション、スワップ等)にかかる取引です。「長期決済期間取引」とは、有価証券等の受渡または決済を行う取引であって、約定日から受渡日(決済日)までの期間が5営業日または市場慣行による期間を超えることが約定され、反対取引に先立って取引相手に対して有価証券等の引渡または資金の支払いを行う取引です。

当会では、派生商品取引に関して、以下の方針に基づき管理を行っています。なお、長期決済期間取引は行っていません。

①リスク資本及び信用供与額の割当方法に関する方針

- ・当会では、余裕金運用規程および余裕金運用会議で派生商品取引の運用限度額、運用目的、方法を定める中で総体のリスク量の圧縮を図っていますが、現時点では具体的なリスク資本の割当方法は定めていません。

・派生商品取引の信用供与額の割当方法については、リスク管理委員会において金融機関別の派生商品取引の与信限度額を定めるとともに、ロスカット基準を定め適切なリスク管理を行っています。

②担保による保全及び引当金の算定に関する方針

当会では、長期決済期間取引を行っていないため定めていません。

③自会の信用力の悪化により担保を追加的に提供することが必要となる場合の影響度に関する説明

当会では、長期決済期間取引を行っていないため定めていません。

(1) 派生商品取引及び長期決済期間取引の状況

項目	平成17年度	平成18年度
与信相当額の算出に用いる方式	カレント・エクスポージャー方式	カレント・エクスポージャー方式

平成17年度

(単位:百万円)

項目	グロス再構築コストの額	信用リスク削減効果勘案前の与信相当額	担保			信用リスク削減効果勘案後の与信相当額
			現金・自会貯金	債券	その他	
(1) 外国為替関連取引	—	—	—	—	—	—
(2) 金利関連取引	—	—	—	—	—	—
(3) 金関連取引	—	—	—	—	—	—
(4) 株式関連取引	—	—	—	—	—	—
(5) 貴金属(金を除く)関連取引	—	—	—	—	—	—
(6) その他コモディティ関連取引	—	—	—	—	—	—
(7) クレジット・デリバティブ	—	—	—	—	—	—
派生商品合計	—	—	—	—	—	—
長期決済期間取引						
一括清算ネットティング契約による与信相当額削減効果(▲)		—				—
合計	—	—	—	—	—	—

平成18年度

(単位:百万円)

項目	グロス再構築コストの額	信用リスク削減効果勘案前の与信相当額	担保			信用リスク削減効果勘案後の与信相当額
			現金・自会貯金	債券	その他	
(1) 外国為替関連取引	0	221	—	—	—	221
(2) 金利関連取引	0	169	—	—	—	169
(3) 金関連取引	—	—	—	—	—	—
(4) 株式関連取引	—	13	—	—	—	13
(5) 貴金属(金を除く)関連取引	—	—	—	—	—	—
(6) その他コモディティ関連取引	—	3	—	—	—	3
(7) クレジット・デリバティブ	—	136	—	—	—	136
派生商品合計	0	544				544
長期決済期間取引						
一括清算ネットティング契約による与信相当額削減効果(▲)		—				—
合計	0	544	—	—	—	544

(注) 1. 「カレント・エクスポージャー方式」とは、派生商品取引及び長期決済期間取引を時価評価することにより算出する再構築コスト(同一の取引を取引の相手方において取引の継続的履行が不可能となったような場合に、同一の取引を市場で再構成する場合に必要なコスト)に当該取引の想定元本(取引にかかる利息等を計算するための名目の元本)に取引内容や期間に応じた一定の掛目を乗じて算出される金額を加算することで与信相当額を算出する方法のことで、

2. 「クレジット・デリバティブ」とは、信用リスクをヘッジ(回避・低減)するために、債務者である会社等の信用力を指標に将来受け渡す損益を決める取引です。

3. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

(2) 与信相当額算出の対象となるクレジット・デリバティブ

受益証券等ファンドの一部に「クレジット・デリバティブ」が含まれていますが、詳細についての把握が困難なため開示していません。また、本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

(3) 信用リスク削減手法の効果を勘案するために用いているクレジット・デリバティブ

受益証券等ファンドの一部に「クレジット・デリバティブ」が含まれていますが、詳細についての把握が困難なため開示していません。また、本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

5. 証券化エクスポージャーに関する事項

◇リスク管理の方針及び手続の概要

「証券化エクスポージャー」とは、原資産にかかる信用リスクを優先劣後構造のある二以上のエクスポージャーに階層化し、その一部または全部を第三者に移転する性質を有する取引のことです。

当会では、証券化エクスポージャーを投資家として保有しており、オリジネーター等としては関与していないため、証券化エクスポージャーに関する固有の方針等は現時点では定めていません。証券化エクスポージャーの取得に当たって発生する信用リスクに関しては、余裕金運用規程・細則等で定められた一般法人の発行する債券の取得と同様な考え方を基本としています。また、リスク管理の方針及び手続についても同様です。

(注) オリジネーターとは、証券化の対象となる原資産をもともと所有している立場にあることを指します。

◇信用リスク・アセットの額算出方法の名称

証券化エクスポージャーにかかる信用リスク・アセットの額の算出については、標準的手法を採用しています。

◇証券化取引に関する会計方針

証券化取引については、「金融商品に係る会計基準」及び「金融商品会計に関する実務指針」に基づき会計処理を行っています。

◇証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関の名称

証券化エクスポージャーのリスク・ウェイト判定に当たり使用する格付は、以下の適格格付機関による所定の要件を満たした依頼格付のみ使用し、非依頼格付は使用しないこととしています。

適格格付機関
株式会社格付投資情報センター (R&I)
株式会社日本格付研究所 (JCR)
ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク (Moody's)
スタンダード・アンド・プアーズ・レーティング・サービスズ (S&P)
フィッチレーティングスリミテッド (Fitch)

(1) 当会がオリジネーターである証券化エクスポージャーに関する事項

当会がオリジネーターである証券化エクスポージャーは保有していません。

(2) 当社が投資家である証券化エクスポージャーに関する事項

a 保有する証券化エクスポージャーの額

(単位:百万円)

項目	平成17年度	平成18年度
クレジットカード与信	—	—
住宅ローン	—	—
自動車ローン	—	—
その他	—	25,176
合計	—	25,176

(注) 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

b リスク・ウェイト区分ごとの残高および所要自己資本の額

(単位:百万円)

リスク・ウェイト区分	平成17年度		平成18年度	
	残高	所要自己資本額	残高	所要自己資本額
リスク・ウェイト20%	—	—	8,036	64
リスク・ウェイト50%	—	—	16,378	327
リスク・ウェイト100%	—	—	664	26
リスク・ウェイト350%	—	—	13	1
その他	—	—	—	—

(注) 1. 「その他」には、自己資本比率告示第225条第6項の規定により適用される裏付資産のリスク・ウェイトの加重平均値となるものが該当します。

2. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

c 自己資本比率告示第223条の規定により自己資本から控除した証券化エクスポージャーの額

(単位:百万円)

項目	平成17年度	平成18年度
クレジットカード与信	—	—
住宅ローン	—	—
自動車ローン	—	—
その他	—	82
合計	—	82

(注) 1. 自己資本比率告示第223条の規定に基づき、格付により自己資本控除になるものおよび信用補完機能を持つI/Oストリップスによる自己資本控除となった証券化エクスポージャーを記載しています。

2. 本開示は、平成18年度以降適用される新基準に対応しているため、平成17年度の計数を算出していません。

d 経過措置の適用により算出される信用リスク・アセットの額

当社では、自己資本比率告示附則第13条は適用していません。

6. オペレーショナル・リスクに関する事項

◇リスク管理の方針及び手続の概要

「オペレーショナル・リスク」とは、会を運営するにあたり偶発的（不祥事による損失等）に発生するリスクです。当社では、管理すべき主なオペレーショナル・リスクを事務リスク、システムリスクと認識し、それぞれの管理方針により適切に管理しています。

○オペレーショナル・リスクの総合的な管理

当社では経営層によって構成されるリスク管理委員会を毎月開催し、各部門に事務リスク、システムリスク等にかかわる問題点が発生した場合、随時報告を受け、問題点の分析・評価を行うとともに改善策を策定し適切に実施する態勢をとっています。

○事務リスク管理

正確な事務を怠る、あるいは事故、不正等を起こすことにより損失を被るリスクです。当会では、全部署に事務リスクが存在することを認識し、全部署で当会策定の「自主点検マニュアル」により事務処理の精度向上と不正事故防止に向けて取り組んでいます。

○システムリスク管理

コンピュータシステムの事故、故障から生じるリスクと、コンピュータが不正に使用されることにより損失を被るリスクです。

当会では、情報資産を適切に保護するために「セキュリティポリシー」を定めるとともに、コンピュータシステムを保護するための「コンティンジェンシープラン」を定めています。

○その他のオペレーショナル・リスク管理

事務リスク、システムリスク以外のリスクについては、リスク管理委員会の中で分析・評価し、改善策を策定するなど適切な管理を行っています。

◇オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称

○当会では、オペレーショナル・リスク相当額の算出に当たり、基礎的手法を採用しています。

○基礎的手法とは、1年間の粗利益に0.15を乗じた額の直近3年間の平均値によりオペレーショナル・リスク相当額を算出する方法です。

なお、1年間の粗利益は、経常利益から国債等債券売却益・償還益およびその他経常収益を控除し、役員取引等費用、国債等債券売却損・償還損・償却、経費、その他経常費用および金銭の信託運用費用を加算して算出します。

7. 出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項

◇出資等又は株式等エクスポージャーに関するリスク管理の方針及び手続の概要

「出資等又は株式等」とは、貸借対照表上の有価証券勘定及び外部出資勘定の株式または出資として計上されているものです。

子会社株式及び関連会社株式等の取得による時価のない株式または外部出資の管理方針等は、子会社管理規程または個別審査により適切に取得するとともに、資産自己査定実施細則等に基づき適切にリスク管理を行っています。

その他有価証券として区分される時価のある株式についての管理方針等は、マーケットリスク管理の

(1) 出資等エクスポージャーの貸借対照表計上額及び時価

(単位:百万円)

区 分	平成17年度		平成18年度	
	貸借対照表計上額	時価評価額	貸借対照表計上額	時価評価額
上場	19,095	19,095	20,522	20,522
非上場	65,619	65,619	65,373	65,373
合計	84,714	84,714	85,895	85,895

(2) 出資等エクスポージャーの売却及び償却に伴う損益

(単位:百万円)

区 分	平成17年度			平成18年度		
	売却益	売却損	償却額	売却益	売却損	償却額
上場	470	41	—	1,314	64	—
非上場	—	—	10	19	—	8
合計	470	41	10	1,334	64	8

(3) 貸借対照表で認識され、損益計算書で認識されない評価損益の額（その他有価証券の評価損益等）

(単位:百万円)

区 分	平成17年度		平成18年度	
	評価益	評価損	評価益	評価損
上場	7,863	6	7,964	79
非上場	10	—	—	—
合計	7,873	6	7,964	79

(4) 貸借対照表及び損益計算書で認識されない評価損益の額（子会社・関連会社株式の評価損益等）

(単位:百万円)

区 分	平成17年度		平成18年度	
	評価益	評価損	評価益	評価損
上場	—	—	—	—
非上場	—	—	—	—
合計	—	—	—	—

8. 金利リスクに関する事項

◇リスク管理の方針及び手続の概要

「金利リスク」とは、金融機関の保有する資産・負債のうち、市場金利に影響を受けるもの（例えば、貸出金、預け金、有価証券、貯金等）が、金利の変動により発生するリスクのことです。

当会では、「金利リスク」は「マーケットリスク管理」の中で適切な管理を行っています。

○マーケットリスク管理

マーケットリスクとは、金利、価格、為替相場等の変動により保有する資産（ポートフォリオ）や金融商品の時価が変動し損失を被るリスクをいいます。

当会では、「金利リスク」を含む「マーケットリスク」を極めて重要な収益源と位置づけ、安定的かつ健全な財務体質の確立を目標に、中長期的な視点にたったポートフォリオの構築を目指し、最適なアセット配分、ならびにリスクテイク、リスク分散の観点から適切なリスク管理を行っています。

リスクテイクを行うにあたっては、ロスカット基準、損失限度額、評価差額の基準を設定し日々の管理を行うとともに、VaR法やBPV法によりリスク量の計測・評価を行い、リスク量の変化を的確に把握し、大幅な市場の変化に対応可能な態勢を整備しています。

また、リスク管理の実効性を担保するために、マーケット取引業務の遂行にあたっては、投資方針等の決定、取引の執行及びモニタリングをそれぞれ分離・独立して行っています。具体的には、投資方針等はALM委員会及び余裕金運用会議、執行はフロント・セクション、モニタリングはマーケットリスク管理部署が担当し、マーケットリスクにかかる運営状況等について、毎月、リスク管理委員会及び理事会に報告する体制をとっています。

○金利リスクの算定方法の概要

当会では、市場性資産に加え、貸出金や預け金、貯金等の資産・負債の金利リスク量の算出を、分散共分散法によるVaR法（観測期間1年、信頼区間99%、保有期間1カ月）により毎月計測、評価し、ALM委員会等で金利変動に伴う損失発生可能額の把握に努めています。

(1) 金利リスクに関して当会が内部管理上使用した金利ショックに対する損益又は経済価値の増減

(単位:百万円)

項 目	平成17年度	平成18年度
当会が内部管理上使用した金利ショックに対する損益・経済価値の増減額	8,387	7,078